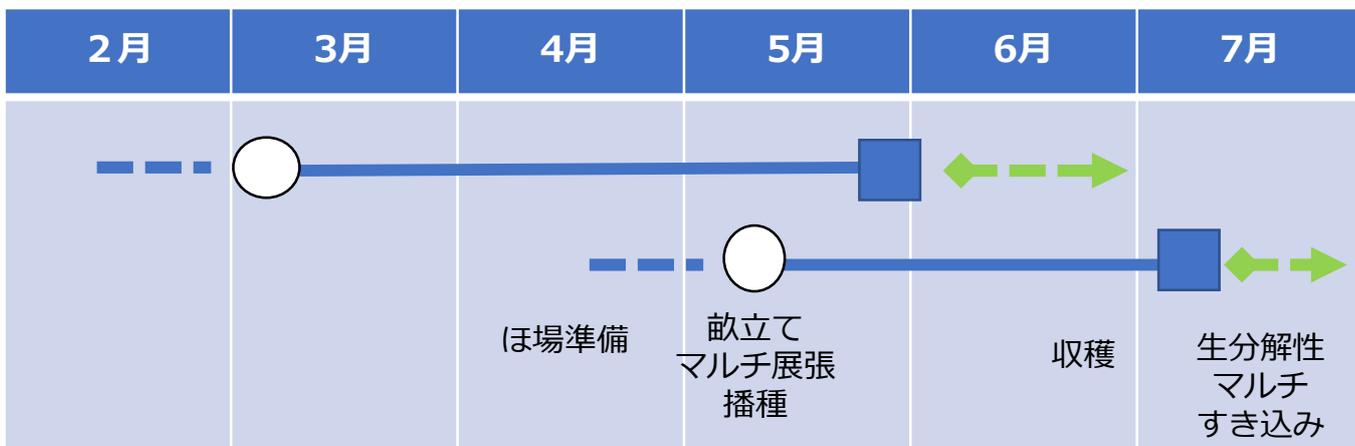


ダイコン栽培暦（春まき）

★本資料に記載されている農業は令和6年時点での内容です。

■栽培体系（春まき夏穫り） 購入または使用前に必ずラベルや登録内容をご確認ください。



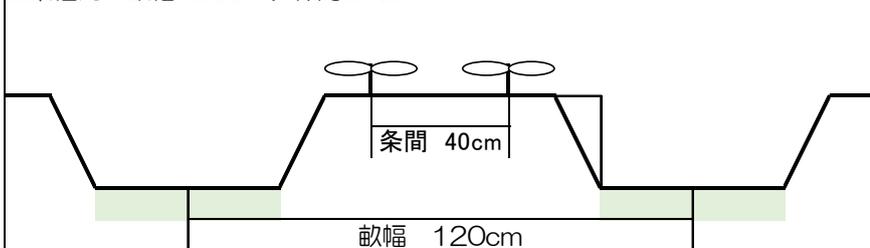
■作型の特徴

ダイコンの生育適温は20℃前後であるが、平均気温23℃を超えると生育障害を起こしやすい。このため、夏に冷涼な高冷地が夏ダイコン産地として適する。初夏獲りは播種時期が低温であるため、抽苔の回避がポイント。

1. ほ場準備

耕土が深く（20cm以上）排水性のよいほ場を選定する。排水不良地は明渠など排水対策を図る。また、表土は十分砕土する。

2条植え：畝幅120cm、株間24cm



		施肥量 (kg/10a)
土づくり	苦土石灰	100
基肥	B入り868	100

2. 施肥

播種の5～7日前に元肥を施用する。播種の10日前までに苦土石灰を散布し、耕起しておく。堆肥を投入する場合は、前作の夏作物（緑肥）の作付け前に10aあたり1～2t投入し、十分腐熟させておく。未熟堆肥の春先の投入はしないようにする。播種時まで有機物が未熟のまま残っていると、岐根や病気の発生をまねくおそれがあるため注意する。

3. 畝立て・マルチ展張

施肥を全面施用し、耕起後畝立てする。畝の高さは傾斜や排水状況、耕度深にもよるが、20cm程度にする。また、畝立てと同時にマルチを展張する。マルチは地温確保を目的に黒マルチを使用する。キスジノミハムシに根部を食害されると商品価値が著しく低下するので、畝立て時にダイアジノン粒剤を施用する。



4. 播種

2条植え：畝肩100cm、株間24cm、条間40cm。1穴2～3粒播き。覆土は1cm程度として、覆土後覆土する。10aあたり4dl。乾燥が続いている場合は、畝立てから播種まで1連の作業を行い、土が乾かない夕方に播種作業が終了するようにする。



5. 抽苔防止

3月下旬～4月における播種では、播種後の低温により抽苔する場合があるため、不織布などでべた掛け被覆する。播種後にべたがけすることで、抽苔を防ぎ、生育を確保できる。

べた掛け資材をかけすぎると徒長し、障害を招く場合があるため、播種後1か月程度で除去する。

6. 間引き

本葉2～3枚時に形の良いものを残す。1本立てとなるようにする。薬剤を用いた場合は間引いたものを食用にしない。間引き作業と同時に土による首振りを防ぐため、株元に土を被せる

7. 土寄せ

(可能であれば) 軽く土寄せする。遅れると細根を痛め軟腐病菌の侵入を助長するので注意する。

8. 収穫

用途や品種特有の根の肥大・形状になったら収穫する。収穫が早すぎると根部の青みが十分でなく、遅すぎると肌の荒れが目立つようになり、す入りも入りやすくなる。気温の上昇しない時間に収穫し、できるだけ早く丁寧に洗って、20度程度の涼しい場所で十分に風乾する。箱詰めは出荷直前に行う。

9. 収穫後のほ場管理

収穫残りのダイコンを全部抜き取り、可能な限り圃場外に出す。

10. 生分解性マルチ使用時

作付け終了後、耕耘し、破碎したマルチが土中に埋まるように耕耘する。土壌表面に残っていると風で飛散したり、分解しない可能性があるため、速やかに土の中にすき込むように注意する。すきこみ後1ヶ月程度で概ね分解される。保管する際は、倉庫等の暗室で保管し、加水分解と劣化により強度や機能が低下するため、購入後1年以内に使用する。



■病害虫

ダイコンは根部が商品となるため、土壌病害（萎黄病や軟腐病）、ネグサレセンチュウ、キスジノミハムシ類の対策が重要となる。萎黄病は抵抗性品種が普及しており、発生が少なくなっている。

病害名	4月	5月	6月
アブラムシ類	←		→
キスジノミハムシ	←		→
コナガ	←		→
ヨトウムシ	←		→

■アブラムシ類

ダイコンにはニセダイコンアブラムシとモモアカアブラムシが多く、葉裏に群生し吸汁による被害の他、ウイルス病を媒介する。

吸汁された被害葉は黄化して枯死し、株全体の生育が抑制される。ウイルス病に罹病すると生育が劣り肥大せず商品価値が低下するため、薬剤による初期防除を徹底することが重要である。

■キスジノミハムシ

成虫で越冬し、3月頃から活動を始める。年間の発生は6～8月が最も多く、9月中旬以降のダイコンでは被害が少ない。幼虫が地上でふ化して地中に潜ってしまうと、茎葉散布剤が届かなくなるため、その前に防除することが重要である。播種時に土壌処理する粒剤と、生育期に使用する乳剤や水和剤などの茎葉散布剤を適切に組み合わせることで、高い防除効果が得られる。

ほ場周辺のアブラナ科雑草はキスジノミハムシの発生源となるため、ほ場周辺の除草管理も重要である。

■ 薬剤散布例

播種時期	農薬名	対象病害虫	RAC コード
①播種時	ダイアジノン粒剤	キスジノミハムシ、 タネバエ	1 B
②播種後15日 (間引き時)	サイアノックス	アオムシ、アブラム シ類、キスジノミハ ムシ成虫、コナガ、 タマナギンウワバ、 ヨトウムシ(若～中 齢幼虫)	1 B
③播種後25日	ブロフレアSC	コナガ、ヨトウムシ、 ハイマダラノメイガ、 キスジノミハムシ、 カブラハバチ類、ア オムシ、ダイコンハ ムシ	30
④播種後35日	アクセルフロアブル	カブラハバチ、キス ジノミハムシ、ダイ コンハムシ、ハイマ ダラノメイガ、ヨト ウムシ	22B
⑤播種後45日	ベネビアOD	アブラムシ類、コナ ガ、カブラハバチ類、 キスジノミハムシ、 ダイコンハムシ、ハ モグリバエ類、ハイ マダラノメイガ、ヨ トウムシ、アオムシ	28
強風・大雨後	カスミンボルドー	軟腐病 黒斑細菌病 ワッカ症	

播種時の土壌処理に加えて定期的な茎葉散布が重要である。粒剤の処理後、15日後に、キスジノミハムシに効果の高い薬剤を中心に10日間隔で茎葉散布する。表に記載した薬剤に加えて、パダンSG水溶剤、スタークル/アルバリン顆粒水溶剤なども効果が高いと考えられる。

ダイコン栽培暦（秋まき）

■ 栽培体系 （秋まき秋冬穫り）

★本資料に記載されている農薬は令和6年時点での内容です。
購入または使用前に必ずラベルや登録内容をご確認ください。



■ 作型の特徴

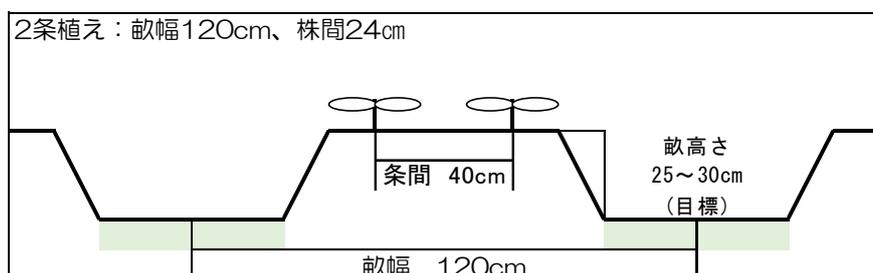
この作型は、生育適温に最もあった適作型であるが、早まきする場合、病害虫や生理障害が発生し、品質低下につながるので注意する。また、肌の良し悪しが商品性を大きく左右するので、耕土が深く、排水が良いほ場を選択するとともに、深耕や排水対策を積極的に行う。

秋冬取りは春巻きではアブラムシの防除によるウイルス汚染を回避することが技術上のポイントとなるが、根部の肥大期が適温となるためつくりやすい作型である。

■ ほ場準備

未熟な有機物や肥料濃度が高いと岐根や立枯病の原因になる。地力を増進する完熟堆肥は前作の夏作物（緑肥）の作付け前に10aに1～2t投入する。苦土石灰は、播種の2週間～1か月前に投入する。

肥料は播種の1週間前に投入し、よく耕す。耕土が深く（20cm以上）、排水の様ほ場がよい。排水不良地は排水対策を図る。堆肥は前年に入れて充分腐熟させておく。未熟堆肥や春先の投入はしない。表土は十分碎土する。



施肥例(kg/10a)		施用量
土づくり	苦土石灰	100
基肥	B入り868	90

■ 施肥

播種の5～7日前に元肥を施用する。播種の10日前までに苦土石灰を散布し、耕起しておく。

■ 畦立て・マルチ被覆

施肥を全面施用し、耕起後畦立てする。畝の高さは鶏舎、排水状況、耕度深にもよるが、20cm程度にする。また、畝立てと同時にマルチを展張する。8月に播種する場合は、白マルチを使用し、9月以降は黒マルチを使用し、地温を確保する。キスジノミハムシに根部を食害されると商品価値が著しく低下するので、畦立て後に防除する。

■ 播種

2条植え：畝幅100cm、株間30cm、条間35～45cm。1穴2～3粒播き。覆土は1cm程度として、覆土後覆土する。

10aあたり6～7dl。乾燥続きの場合は、畝立てから播種まで1連の作業を行い、土が乾かない夕方に播種作業が終了するようにする。

早播きは病害虫による被害や根の内部障害が助長され、また遅播きでは肥大不足の危険が生じる。各地域・作型にあった適期播種を行う。

■ 間引き

本葉2～3枚時に形の良いものを残す。2回目は本葉6～7枚時に1本立てとなるようにする。薬剤を用いた場合は間引いたものを食用にしない。間引き作業と同時に土による首振りを防ぐため、株元に土を入れる

■ 土寄せ

本葉5～6枚頃に軽く土寄せする。遅れると細根を痛め、軟腐病菌の侵入を助長するので注意する。

■ 収穫

用途や品種特有の根の肥大・形状になったら収穫する。早すぎる収穫は根部の青みが十分でなく、遅すぎると肌の荒れが目立つようになり、す入りも入りやすくなる。気温の上昇しない時間に収穫し、できるだけ早く丁寧に洗って、涼しい場所で十分に風乾する。箱詰めは出荷直前に行く。

■ 収穫後のほ場管理

収穫残りのダイコンを全部抜き取り、可能な限り圃場外に出す。

■ 生分解性マルチ使用時

作付け終了後、耕耘し、破碎したマルチが土中に埋まるように耕耘する。土壌表面に残っていると風で飛散したり、分解しない可能性があるため、速やかに土の中にすき込むように注意する。すきこみ後1ヶ月程度で概ね分解される。保管する際は、倉庫等の暗室で保管し、加水分解と劣化により強度や機能が低下するため、購入後1年以内に使用する。

■ 薬剤散布例

播種時期	農薬名		RAC コード
①播種時 (こだわり基準)	ダイアジノン粒剤	キスジノミハムシ、 タネバエ	1 B
①播種時	フォース粒剤		3 A
②播種後15日 (間引き時)	サイアノックス		1 B
③播種後25日	ブロフレアSC	コナガ、ヨトウムシ、 ハイマダラノメイガ、 キスジノミハムシ、 カブラハバチ類、ア オムシ、ダイコンハ ムシ	30
④播種後35日	アクセルフロアブル		22B
⑤播種後45日	ベネビアOD		28
強風・大雨後	コサイドー カスミンボルドー		

■ キスジノミハムシ

アブラナ科の野菜に寄生する。4～10月に発生し、7～8月が発生のピークとなる。幼虫が地上でふ化して地中に潜ってしまうと、茎葉散布剤が届かなくなるので、その前に防除することが重要で、播種時に土壌処理する粒剤と、生育期に使用する乳剤や水和剤などの茎葉散布剤を適切に組み合わせることで、高い防除効果が得られます。

成虫は主にイヌガラシやスカシタゴボウといったアブラナ科雑草でも増殖します。圃場周辺の雑草防除は、生育初期の成虫密度を減らすのに有効。フォース粒剤施用20日後から7～10日間間隔で散布。

■ 軟腐病

初生皮層が剥離する播種後25～30日に感染しやすい。銅水和剤を1回散布する。